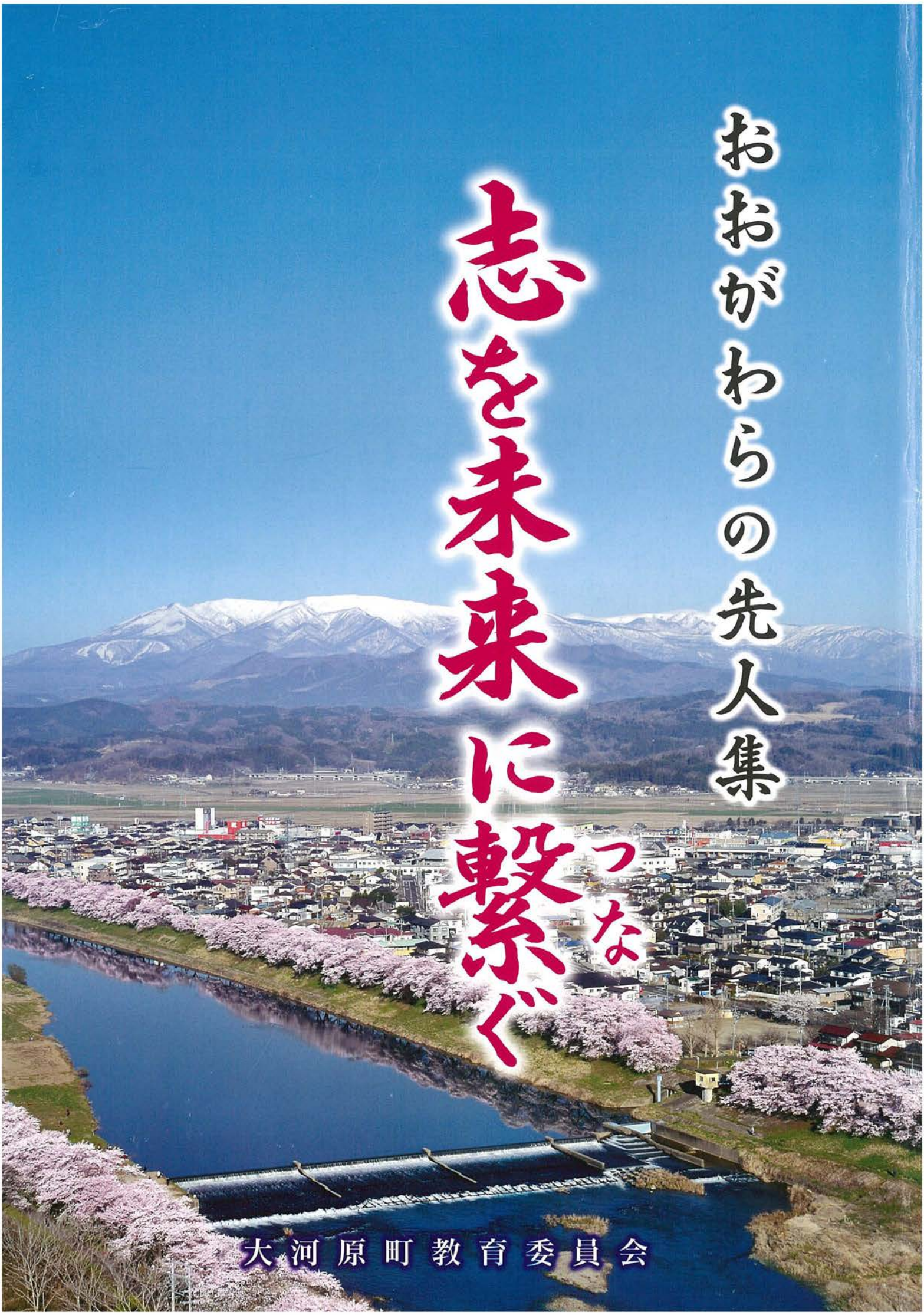


おおがわらの先人集

志を未来に繋ぐ（つなぐ）

大河原町教育委員会

志を未来に繋ぐ

金メダリストの三宅義信さんは大河原中学校で
中学生に言った
「家での自由時間に(重量挙げの)練習を毎日した」
「練習で泣いて 試合で笑え」

大河原町で学び 社会に大きく貢献した 多くの先人が
後に続く私たちに 沢山のメッセージを残してくれた

その先人の思い そして志を しっかり受け止め
私たちの体の中に 染み込ませたい
そして
未来の世代へ繋ぎたい

教育長 齋 一志

おおがわらの先人集「志を未来へ繋（つな）ぐ」

目次

□ 高山（たかやま）開治郎（かいじろう） ―桜並木を後世に― ………… 1

□ 松山（まつやま）京子（きょうこ） ―町の命を救った先生― ………… 5

□ 佐藤（さとう）佐太郎（さたろう） ―ふるさとを豊かに詠んだ歌人― ………… 9

□ 尾形（おがた）安平（あんぺい） ―大河原の発展に― ………… 13

□ 庄司（しょうじ）一郎（いちろう） ―大河原のために― ………… 17

□ 大泉（おおいずみ）孝（たかし） ―教育ひとすじに身を捧げ大河原町名誉町民となる― ………… 21

□ 村井（むらい）江三（こうざん） ―松尾芭蕉にあこがれて― ………… 26

□ 高橋（たかはし）与右ヱ門（よえもん） ―大河原の発展に尽くした高忠屋― ………… 30

□ 田中（たなか）實（みのる） ―私しか作れないお菓子を目指して― ………… 35

□ 三宅(みやけ)義信(よしのぶ)
義行(よしゆき) ―偉業を成しとげた三宅兄弟― ……………… 40
□ 佐藤(さとう)源三郎(げんざぶろう) ―大河原小学校を再建しよう― ……………… 45
□ 尾形(おがた)亀之助(かめのすけ) ―大河原が生んだ天才詩人― ……………… 48
□ 太田(おおた)麻之助(あさのすけ) ―全国に知られた裏作の里をつくった― ……… 50
□ 山家(やんべ)竹石(ちくせき) ―大河原の俳句のために― ……………… 53

〈コラム〉

○ 照井(てるい)太郎(たろう) ―洞秀院に眠る　源頼朝と戦い　大河原で戦死した人― … 56
○ 山家(やんべ)幸内(こうない) ―ブラジル等へ一六〇人の移民を　カムチャツカに缶詰工場を― … 58
○ 浅草(あさくさ)宇一郎(ういちろう) ―西の寺（最勝院）に眠る　明治維新に関わる大河原の人― … 60
○ 佐藤(さとう)源十郎(げんじゅうろう) ―大河原の町の発展に尽力した元町長― ……… 62

高山開治郎 ―桜並木を後世に―

「なんて美しい桜なんだろう。」

蔵王の山々をはるかに望み、白石川沿いに咲きほこる桜の前で多くの人々が感嘆の声をあげ、カメラのシャッターを切る音があちらこちらから聞こえてきます。

仙台から南へ約三十キロメートル。大河原町の中心部を白石川がとうとうと流れます。両岸の堤防には約八キロメートルにわたって桜並木が続きます。毎年、桜の季節になると県の内外から大勢の観光客が訪れ、「一目千本桜」の名で東北地方でも有数の桜の名所となっています。

この桜並木は、ある一人の人物の壮大な夢の結晶なのです。その名は高山開治郎。かれは、明治九（一八七六）年四月、江戸時代から続く由緒ある旅館の長男として大河原の地に生まれました。しかし、開治郎が十五歳の時、父親が亡くなりました。そして、家業の旅館も廃業しなければならなくなりました。まだ若かった開治郎にはどうすることもできませんでした。

高山開治郎

明治二十四（一八九一）年、開治郎は十五歳でふるさとをはなれて東京に働きに出ました。これまで何不自由なく暮らしていた開治郎にとって、身よりもなく朝から晩まで住み込みで下働きをする日々はとてもつらく厳しいものでした。いく度となくふるさとの宮城に帰ることを夢見ました。幼なじみの笑顔や生まれ

蔵王連峰を望む白石川の桜並木（大河原町）

育った大河原の町並み、残雪をいただいた雄大な蔵王連峰、清らかな流れの白石川。いつも思い浮かぶのはなつかしいふるさとの景色でした。

（みんなはどうしているだろうか……。）

しかし、当時大河原に帰るのは蒸気機関車を乗り継いでも二日がかりの長旅です。そんな休みなどを取れるわけがありません。そして何よりも高い切符代をはらうゆとりなど開治郎にはあるはずもありませんでした。

（いつか必ず胸を張ってふるさとに帰るぞ。それまでのしんぼうだ。）

開治郎は来る日も来る日も働き、商売の仕方を身につけました。店の仕事が終わると寝る間もおしんで勉学にはげみました。そして、苦難の末に会社をおこして成功を収めたのでした。

そのころ、東北地方はたびたび冷害や水害におそわれていました。農民は米の不作に悩み、仙台や福島では米の値上がりに反対して「米騒動①」といわれる暴動も起きていました。新聞や手紙で伝え聞くそれらの知らせを、開治郎はもどかしく感じるのでした。

（東京ではこんな豊かな暮らしをしているのに……。何か自分にできることはないだろうか。）

開治郎は日々の忙しさに追われながらも、ふるさとの人々の暮らしがとても気がかりでした。大河原を離れること三十数年。東京で開治郎は新聞社を始めたり画商をしたりと手広く事業を進め、立派な実業家②として広く知られるようになりました。しかし、いつも心は宮城に、大河原にありました。開治郎はひとり、ふるさとの方角の空をじっと見つめるのでした。

そんなとき、以前から進められていた白石川の改修工事が完成するとの知らせが届きました。

これまで白石川はたびたび氾濫し、そのたびに田畑は流され、家々も大きな被害を受けていました。六年間にもわたる大工事の末、川幅は広げられ堤防が築かれ、水害の心配はなくなったのでした。

「今こそ恩返しをするときだ。しかし、食べ物やお金を寄付したのではすぐになくなってしまう。何かもっと心に

残るものを、みんながずっと喜んでくれるものをおくりたい。」

開治郎が住んでいた東京の屋敷の近くには、とても見事な桜並木があり、地域の人々のいこいの場所になっていました。花見の季節には多くの人々が行きかい、笑顔で満ちあふれていました。夏は強い日差しをさえぎり、木かげで休むことができました。人々の暮らしの中にはいつも桜並木がありました。

「これだ！今わたしにできることは！」

目の前がぱっと明るくなったような気がしました。

大正十二（一九二三）年、四十七歳の開治郎は白石川沿いの桜並木を夢見て、七百本の桜の苗木をおくることにしました。開治郎は東京から二人の植木職人を連れ、地元の職人たちといっしょに現在の大河原町から柴田町の船岡にかけて白石川沿いに植樹③しました。そして、桜の苗木が根づいたのを確かめて、昭和二（一九二七）年にも、さらに五百本の苗木を植樹しました。そのときには、柴田農林学校（現在の柴田農林高等学校）の生徒もいっしょに奉仕作業を行いました。

植樹された桜の若木（大河原町）

開治郎は、一生懸命若木を植樹する生徒たちを見つめました。

こうして、ふるさとを思う一心で、合計千二百本もの桜の苗木を植えたのです。当時のお金で四千円④あまりのお金を、町のために差し出したのでした。昭和八（一九三三）年、町は、その栄誉⑤をたたえて、白石川のほとりに「桜樹碑」を建てました。

桜樹碑

昭和十七（一九四二）年、開治郎は六十六歳でこの世を去りました。その後、日本は大きな戦争に敗れ、世の中は混乱し、人々は貧しさに苦しんでいました。しかし、人々はふるさとの復興のために努力し立ち直り、見事に発展をとげました。その間も桜は毎年咲き続け、人々に希望と笑顔をあたえてくれたのです。

桜（ソメイヨシノ）の寿命は約六十年から七十年といわれています。しかし、約九十年たった今も、開治郎の志を受けついだ地域の人々の手によって世話や新たな植樹が続けられ、毎年きれいな桜を咲かせています。宮城県を代表する桜の名所として東北の「桜切手」にも描かれるまでになりました。

今も人々の心に、開治郎の思いが咲き続けています。

---

① 米騒動…米の値段が高くなり、生活に苦しむ人々がコメを安くするよう要求して米屋などをおそった事件。
② 実業家…会社などを作り経営をする人。
③ 植樹…木を植えること。
④ 四千円…当時（大正十年）の大卒初任給が五十円、今の約二千万円ほど。
⑤ 栄誉…めいよ。すぐれたものとして認められほめたたえられること。

※参考資料

・「大河原町さくらの会五周年記念誌・桜に魅せられて」大河原町桜の会編集委員会　平成十四年三月発行
・「大河原町・町制施行百周年記念写真集・新しい過去から」大河原町役場　平成元年四月発行
・「行在所記念碑を語る―高山家と桜」明治天皇行在所「記念碑」移転実行委員会　平成十二年六月発行

白石川と桜並木（大河原町）

松山（まつやま） 京子（きょうこ） ―町の命を救った先生―

昭和二十四（一九四九）年、それまで医者のいなかった金ヶ瀬に初めてお医者さんが来ました。病気になると、大河原町まで行かなければならなかった金ヶ瀬村の住民にとっては、待ち望んだお医者さんでした。それから四十九年間、八十九歳になるまでずっと私たちの命を守ってくださったこのお医者さん、それが松山京子先生です。家族と離れて一人金ヶ瀬に住み、どんな人にも優しく親切に診察してくれた先生は、金ヶ瀬の人たちのために一生をささげてくれたのでした。

松山京子先生は、明治三十九（一九〇六）年六月四日、三重県の名賀（なが）郡に月井（つきい）家の長女として生まれました。

松山京子先生

昭和七（一九三二）年には、東北大学の助教授であった松山徳蔵（とくぞう）さんと結婚しました。女学校時代には教師を目指していましたが、父親の説得で東京医学専門学校、現在の東京女子医科大学に進学しました。女学校の時に吉岡弥生（やよい）先生に医者としての姿勢を教えられました。

「医学は毎日進歩する。今日効（き）いた薬が、明日は毒（どく）にもなる恐ろしいもの。」

先生はこの教えを忠実（ちゅうじつ）に守り、平成七年八十九歳で医者をお辞（や）めになるまで毎日最新の医学書を読み続けました。

東京医学専門学校を卒業した後は、豊橋（とよはし）市の中村内科医院に勤務（きんむ）

しました。昭和八（一九三三）年、東北大学小児科宮城県衛生課に勤務し、昭和十六（一九四一）年から大河原保健所に勤務。昭和二十（一九四五）年八月に、大河原町で終戦を迎えました。

終戦の年の暮れ、仙台には帰る家もなく疎開先の大河原町小山田で診療所を開きました。当時は借りている二部屋のうち一室に机・棚を並べ、血圧計・天びん・注射器数本という少ない器具での開業生活が始まりました。それでも、一日数十人もの患者さんが受診に来たり、一日数件の往診をしたりしました。

そして、昭和二十三（一九四八）年の暮れには、無医村だった金ヶ瀬村の村長さんからの「ぜひ、金ヶ瀬村で開業してほしい。」という強い要望を受け入れ、翌年三月に「松山医院」を開きました。この時、四十二歳でした。当時は自家用車などない時代でしたから、大河原町の医院まで歩いて通っていた金ヶ瀬村の住民たちにとって、本当に待ち望んだお医者さんでした。

それから先生は、地域住民の健康のために、毎日働いてくださいました。開業当時は、毎日百人以上の患者がやってきました。病気で医院に通えない患者さんの所には、自転車やスクーターに乗って往診に行きました。満足に食事をする時間もないほどの忙しさでした。自転車やスクーターでの往診を八十二歳まで続けていました。

今でこそきれいな水道水をふんだんに何不自由なく使っていますが、当時、金ヶ瀬には水が少なく井戸水も豊富ではなかったので、町を流れている農業用水で米をといだり洗たくをしたり風呂水をくんだりしていました。上流の人たちが、洗い物で汚れた水を流し、下流の人たちが野菜を洗ったり歯を磨いたりしていました。その不衛生さが村に伝染病を広めることになってしまったのです。

衛生講話の様子

松山先生は、この伝染病を防ぐために、まず村の人々に教育をしなければならないと考えました。そこで、夜

に村の各地区を訪問し、衛生についての講話をしました。その結果、住民は井戸水を使うようになり、伝染病も少しずつなくなっていきました。

また、松山医院の開業と同時に先生は、金ヶ瀬小学校の校医になりました。小学校で子どもたちを検診すると、目の伝染病であるトラコーマに四人に一人が感染していたことが分かりました。そこで、トラコーマをなくすには「清潔にすることが大事」と、洗眼指導を徹底して行いました。その成果が実り、三年後にはトラコーマにかかる児童はいなくなりました。

さらに、伝染病の「赤痢」という病気が流行した時にも金ヶ瀬小学校の体育館を病室にして、大勢の患者を診察し命を救うことができました。その活動が認められ、昭和二十五（一九五〇）年、金ヶ瀬小学校は、県の健康優良校として表彰されました。

昭和三十一（一九五六）年になると、町村合併により「大河原町金ヶ瀬」となりましたが、先生は引き続いて金ヶ瀬小学校・金ヶ瀬中学校の校医となりました。

学校では、毎年夏休み前に「松山先生の健康講話」がありました。先生は特に「食中毒には気をつけるように」と話されました。

戦中戦後は、まだ食べるものが少ない時代でしたから、栄養失調から病気にかかる子が多く、先生はいつも「子どもたちを病気から守らなくてはならない。」と思っていました。やがて、甘いお菓子などが子どもたちの周りにあふれる時代となり、昭和四十（一九六五）年ごろには、目に見えて肥満児が増えてきました。そこで、子どたちとその親に、「バランスの良い食事をとることが大切。」と分かりやすく話して聞かせました。

松山先生は、こうした長年の功績が認められ、数々の表彰や感謝状を受けられました。昭和六十（一九八五）年五月、地域医療に貢献した功績により、女医として最高の名誉である「吉岡弥生賞」を受賞しました。その

健康診断の様子

二年後には、先生への感謝の気持ちから、自叙伝と約四百人の住民から寄せられた原稿により「慈愛」という本が作られました。さらに、翌年五月には、「第二十八代県民の母」を受賞しました。

そんな多くの活躍をなさった松山先生でしたが、平成四（一九九二）年、先生が八十五歳の時、たくさんの人々に惜しまれながら四十三年間勤めていただいた校医をお辞めになりました。その時、「子どもたちがいつまでも、健康ですこやかに育ってほしい。」という願いを込めて、金ヶ瀬小学校と金ヶ瀬中学校にそれぞれ紅白の「ハナミズキ」が贈られました。また、小学校には、「たくさん本を読んで、将来に夢や希望を持ってほしい。」という願いから「松山文庫」をつくり、たくさんの本を寄付しました。

そして、平成七（一九九五）年七月三日。先生はその日の朝まで診察をしていましたが、突然体調を崩され、医者としての仕事を終えられました。その後は仙台で療養に努められましたが、残念ながら平成十六（二〇〇四）年九月。九十六歳でお亡くなりになりました。

地域の人々の健康を守るために、一生懸命つくされた松山京子先生。先生への感謝の気持ちは、多くの人々の心の中にずっと生き続けているのです。

地域の健康守り40年

松山京子医師に「吉岡弥生賞」

宮城・大河原

学校医も36年間

児童らがお祝い文集

受賞したときの新聞記事

※参考資料

・「慈愛」松山先生を語る本刊行委員会（金ヶ瀬公民館）

・「私たちの命を守った人―松山京子医師」（ＤＶＤ）大河原町教育委員会

・「あかぎれ女医さん」中学道徳３副読本「明日をひらく」東京書籍・宮城県版　平成24年

佐藤 佐太郎 ―ふるさとを豊かに詠んだ歌人―

「生れしより六十年か低山の上に蔵王の残雪光る」

この短歌は、蔵王連峰を仰ぎ見る白石川沿いの桜堤にある歌碑に刻まれています。この短歌を詠んだのは、大河原出身の歌人「佐藤佐太郎」です。佐太郎は、数多くの短歌を作り、何冊もの歌集を出版しました。それら数々の短歌は、読む人に強い感動を与えました。

明治四十二（一九〇九）年、佐太郎は大河原町福田に生まれ、三歳頃までここで過ごしました。その後、茨城県平潟町に移り、十六歳の時に東京に出ました。そして、岩波書店に就職して、多くの文人と出会います。その中でも、生涯の師となる斎藤茂吉[①]との出会いは、佐太郎が短歌の世界に導かれるきっかけとなりました。大正十五年には「アララギ」[②]に入り、歌人の道をひたすら歩み、若手歌人としての才能が現れ始めます。佐太郎は、茂吉先生の全てを吸収しようと努力していたようです。茂吉先生は、佐太郎を「佐藤は歌の天才だ」と認め、その信頼は厚かったようです。その後、佐太郎は、読売文学賞、現代短歌大賞などの賞を受け、日本芸術院会員となりました。大河原町からこのような優れた人材が出たことは、大河原町の名誉であり、町民を勇気づけるものとなりました。

佐藤佐太郎

大河原町の思い出を佐太郎は、「郷里のことはほとんど私の記憶にない。鍋釜を沈めた池があったこと、木小屋の前に栗の実が落ちていたその土の匂いぐらいしか覚えていない。」と語っています。幼い記憶しかないという佐太郎ですが、常に故郷を懐かしみ、何度となく大河原に足を運び、幼い頃の思い出を歌に表しています。今では雑木林になっている山も、佐太郎が住んでいたころは桑畑が多く見られたのです。三男である佐太郎は、兄達と畑を遊び場としていて、近くには蚕の餌である桑の木が植えられていて、その実を食べた思い出を詠んでいます。ふるさと「大河原」が、佐太郎の心にしっかり残されていたことが分かります。

「生あたたかき桑の実はむと桑畑に幼きころはよくあそびけり」

佐太郎が鳴子峡を訪れた時のことです。夕暮れの小雨が降る中、険しい山路を一人で進み、しきりにメモを取っていたそうです。伊豆沼の雁を見に行った時にも、終日、沼のほとりを散策して雁を一目見ようとしていたそうです。佐太郎は短歌を作るにあたって、題材となる自然や対象をよく見ることに努め、対象のありさまや物事の本質に迫ろうとしました。そして、分かりやすい日常の言葉を使って、写生的に表現しようとしました。また、佐太郎は、「今夜は歌を作る」と言うと子供を早く寝かせ、徹夜をして歌を作るのに没頭しました。翌朝、奥さんが「何首できた？」と聞くと、「一首もできていない」ということもあり、歌を作ることに厳しく、全身全霊を傾けていたことも分かります。

佐太郎は弟子たちにいつもこう話していました。

「直観する力を養い、正確に表現する。つかの間のことであっても永遠に通じるように生命を歌う。何ごとも自分の体験として歌うべきで、頭の中の作りごとはいけない。したがって、作品には作者の影が差しているべきである。歌の調子には張りが、内容には重さが必要である。」

佐太郎の歌集「帰潮」は、昭和二十七（一九五二）年に出版され、高い評価を受け読売文学賞を受賞しています。その中に、佐太郎の教えが伝わる見事な表現の歌が載っています。秋分の日をとらえて、秋の光は透明で、電車の座席に腰を下ろし床を見ていると、光と自分が一緒に動いていることを表している歌です。

「秋分の日の電車にて床にさす光もともに運ばれてゆく」

過去には、いくつかの教科書に作品が登載されました。短歌の手本となるすばらしい作品ばかりです。

「街灯の光とどかぬ鋪道にて落ち葉あかるく月照りにけり」

街灯の光から外れた暗い舗道で冷たい月の光に照らされている落ち葉が、冬のもの寂しい情景を一層深いものにしています。自然の光に感動している佐太郎の心情が伝わってきます。次に挙げる二つの短歌も、教科書に登載されました。

「夜更けて寂しけれども時により唄ふがごとき長き風音」

「冬の日といへど一日は長からむ刈り田に降りていこふ烏ら」

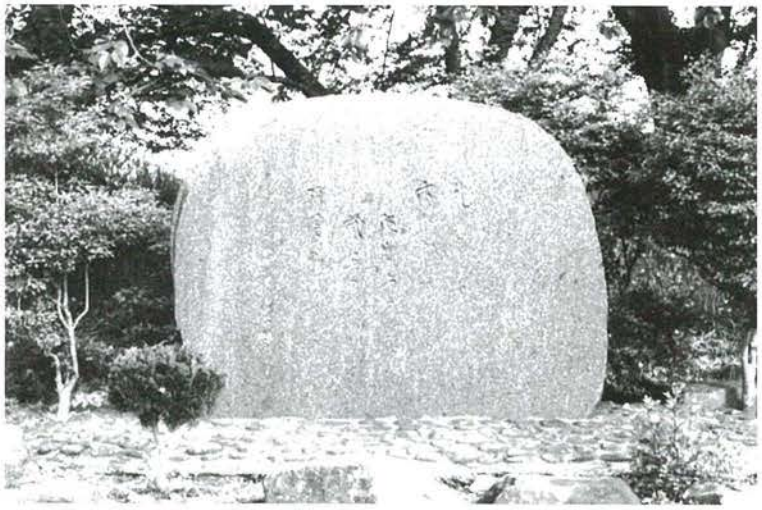
昭和五十二（一九七七）年には、当時皇太子妃であられた美智子妃殿下の御歌の相談を受けることになりました。妃殿下自ら佐太郎の指導を得たいと指名されたのです。昭和歌壇の第一人者としての大変重要な存在であったことがうかがわれます。

昭和五十七（一九八二）年、大河原町甲子公園に自筆の歌碑が建立されます。佐太郎は、夫人と共に除幕式に出席しました。その時、佐太郎はこの歌碑が蔵王連峰を仰ぎ見る白石川沿いの桜堤の傍らに建つと聞き、大変喜びます。蔵王は聖なる山として郷土の人々の尊敬の的となっているというだけではなく、蔵王の山頂に建つ茂吉の碑を仰ぎ見る場所にわが歌碑が建ったことに感動したのです。

昭和六十二（一九八七）年、佐太郎はこの世を去りましたが、佐太郎の功績をたたえ「佐藤佐太郎短歌賞」が創設されるなど、全国の短歌愛好家から今でも愛されています。大河原町でも、子ども短歌・俳句・川柳展には「佐藤佐太郎賞」が設けられ、今でも大河原町の人々の心の中に佐太郎の名は残っています。

① 山形県上山市出身の歌人。大正から昭和にかけてのアララギの中心人物。
② 日本を代表する短歌結社誌。
③ 宮城県北西部にある峡谷。紅葉で有名。
④ 宮城県北部にある渡り鳥の飛来で全国的にも有名な沼。国際的に重要な湿地を保全するラムサール条約に登録された。
⑤ 皇太子のおきさき。

※参考資料
・「生れしより」



大河原町甲子公園にある歌碑

尾形　安平　―大河原の発展に―

「出発、進行！」
町中に響くような大きな汽笛、あらあらしい蒸気音とともに、蒸気機関車がゆっくりと動き始めました。
「万歳！」「万歳！」
大喜びするたくさんの人々の中に、大きな夢を実現させた尾形安平の姿がありました。

安平は、天保三（一八三二）年、高山捨吉の次男として生まれ、名前を十代之助と名付けられました。生まれて間もなく、大河原村の街中で①地主兼②酒造業を営んでいた尾形家の養子となり、安平と名乗りました。
これまで、彼はふるさと大河原の発展のために、米の品種改良をはじめとして、白石川の東側に用水路を設置したり、大河原小学校の新校舎建築に協力したりと、私財を投じて様々なことを行いました。そして、とうとう悲願であった鉄道を③誘致することに成功しました。

今からさかのぼること約百四十年前、明治五（一八七二）年に日本で初めて新橋―横浜間で鉄道が開通しました。
それから七年後の明治十二（一八七九）年、日本鉄道株式会社が近い将来、東北にも鉄道を伸ばす計画があるという話が流れてきました。
いてもたってもいられなくなった安平は、詳しい話を聞こうと、十日以上もかけて、東京に向かいました。

尾形　安平

（十日かけてやってきた東京に、鉄道ならば十二時間で行けるのか。）

鉄道を目の当たりにし、大きな衝撃を受けた安平は、

（大河原の発展のためにはぜひとも鉄道の力が必要だ。）

（何としても大河原に④停車場をつくらなければならない！）

と心に誓いました。

しかし、当初の鉄道会社の計画は、福島から伊具地方を通す計画でした。⑤養蚕が盛んな伊具地方の住民は、蚕の餌である桑が蒸気機関車のすすや灰で汚れ、繭の生産に悪影響があると猛反対をしていました。やむなく越河の坂を越して白石を通り、白石川に鉄橋をかけて宮に入り、向山、堤、小山田、福田を経て船迫方面にぬける計画でした。

（鉄道は、大河原を通らない。これでは、大河原は発展しない…。）

どうしたものかと安平は頭を抱えてしまいました。

現在の大河原駅

鉄道会社の株を多く買い、土地が準備できれば停車場の設置も可能であると聞いた安平は、大河原に飛んで帰り、地元の有力者をまわり、必死に頭を下げて協力を求めました。

「大河原の発展には停車場がぜひとも必要です。協力をお願いしたい。」

熱心な安平の姿に⑥感銘を受けた有力者たちは、安平に進んで協力を申し出ました。協力者を得た安平は、たくさんの鉄道会社の株を買い、停車場に自分の土地を提供することを条件に、白石から岩沼の間の停車場を大河原にするという約束をとりつけました。

（大河原に鉄道の停車場ができる。）

（大河原が大きく発展できる。）

いよいよ安平の夢が実現しようとしています。

先祖から住み慣れた大河原村の家を引き払い、大谷村に引っ越し、この停車場のある土地を中心に街づくりを進めようと、道路や宅地の⑦造成を行いました。そのおかげで、たくさんの人が鉄道の駅の周りに住むようになりました。そのため、これまで⑧宿場町として栄えてきた大河原村と大谷村との間の人の往来が激しくなってきました。

現在の尾形橋

しかし、一つ問題がありました。

大河原村と大谷村の間には白石川が流れ、木造の橋がかかっていました。しかし、大雨による濁流がその橋を今にも流してしまいそうです。

（この橋が流れてしまったら、何もかもおしまいだ。）

（どうしたものか…。）

安平は、大雨の中、白石川の激しい流れを見つめ、考え込みました。

（どんな大雨でも人々が安心して渡れる橋が必要だ。）

（よし、新しい橋をつくろう！）

明治十六（一八八三）年、安平は橋の架け替えをおこないました。「開運橋」の完成です。駅から直線で開運橋、栄町に通じるメインストリートが出来上がりました。⑨尾形座、⑩貸座敷などが並び、人馬の往来で混雑し、大きなにぎわいをみせました。

橋を渡るたくさんの人々の姿を見た安平の目には、うっすらと涙が浮かんでいました。後に開運橋は、彼の功績をたたえ「尾形橋」と呼ばれるようになりました。その四年後の明治二十（一八八七）年十二月十五日に待望の東北本線が開通

し、大河原駅が営業を開始しました。

今でも、たくさんの人々が、通勤、通学のために大河原駅を利用しています。仙南地域の中心として、発展を続ける大河原。尾形安平の思いが今も引き継がれています。

---

① 地主…土地の持ち主
② 酒造業…酒を造ること。また，その職業
③ 誘致…招き寄せること
④ 停車場…駅のこと
⑤ 養蚕…蚕を飼ってその繭から生糸（絹）をつくる産業
⑥ 感銘…忘れられないほど強く感動すること
⑦ 造成…土地などを使えるように作り上げること
⑧ 宿場町…街道の宿駅に発達した集落
⑨ 尾形座…映画などを行う劇場
⑩ 貸座敷…料金をとって会合，食事などに貸す座敷

※参考資料

・ 大河原町史
・ 写真に見る大河原町誌

尾形安平翁頌徳碑

庄司一郎 ―大河原のために―

あるとても寒い日の早朝、マントも着ない新聞少年が仙台の西公園通りの家々に河北新報を配達していました。その時たまたまそこに一台の人力車が通りかかり、少年の前で停まりました。その人力車から紳士が顔をのぞかせ、

「君、君、どこの新聞配達だ？河北の配達か？」

と声をかけました。一瞬、少年は驚きましたが、

「そうです。河北新報です。」

と答えました。すると紳士は、

「私は、河北新報の社長だ。配達が終わったら、私の所に来なさい。名前は何というの？」

と聞きました。少年は緊張のあまり、

「はい、庄司です。」

と答えるのが精一杯でした。

その後、命じられるまま河北新報社に一力健治郎社長を訪ねました。社長はにこやかに少年を迎え、

「寒いところ毎日ご苦労さん。これでマントでも買って暖かくして配達しなさい。」

と言いながら白い封筒を少年に渡しました。社長室を退出して、封筒の中を見ると、マントが三枚も買える大

庄司一郎

金が入っていて、翌朝からはマントに身を包んで元気に新聞を配っている少年の姿が見られました。この少年こそ、後に①衆議院議員に選ばれ、大河原町の名誉町民となった庄司一郎その人でした。

庄司一郎は、明治二十五（一八九二）年一月一日、父房治・母志めの次男として旧角田町牛館に生まれました。生まれて間もなく、一家は大河原町に転居し、一郎は明治三十九（一九〇六）年に大河原尋常小学校高等科を卒業、しばらくして東北学院の旧制中学に編入し②苦学生として勉学に励みました。しかし、③学資が続かず、途中で学校をやめなければなりませんでした。この東北学院で学んだ「聖書」がのちに一郎の考え方を一変させることとなりました。

東北学院を中退した一郎でしたが、勉学の志を捨てきれず、働きながら勉強するために上京しました。一郎の勉学に対する気持ちは並々ならないものがあり、本を読んだらどのページに何が書いてあったか、その資料は本棚のどの本の何ページにあったかなど、書かれていることを暗記するほどでした。さらに、大学の④講義録を読み、あるいは⑤聴講生として講義を聴きながら勉強しました。しかし、貧乏だったので食事も満足にできない日もありました。その頃、一郎の父房治は、細々と仕事をしながら生活していたので、東京にいる一郎に親からの仕送りなどあろうはずもなく、東京に出てきて勉学に励んだものの、以前と同じように生活は苦しくなるばかりでした。そんなある日、当時東京で活躍していた高山開治郎をはじめ、郷土出身の方々を知ることになりました。一郎は、その方々に自分の志を話し、援助してもらい、何とか勉強を続けることができました。

勉学を終えた一郎は、兄重太が主宰する仙南日日新聞で記者として仕事に励みました。記者としての一郎は、新聞を発行することで貧しい人々の心に触れ、自分も生活に困った時に助けてもらったことを思い出し、

（今度は自分が貧しい人々を助ける番だ。）

と、思うようになりました。

そんなある日、一郎は⑥不敬罪で警察に捕まり、刑務所に約二年間入れられました。しかし、これは後に⑦え

ん罪と分かり、一郎の名誉は回復されました。刑務所に入れられている間は、「聖書」、⑧内村鑑三氏著の「聖書の研究」及び「⑨ウェブスター大辞典」の三冊の本だけの差し入れを許され、一郎は終日、「聖書」を読み、英単語の暗記に明け暮れました。ある日、刑務所に来られたキリスト教研究者⑩賀川豊彦氏の講演を聞く機会があり、その時に一郎は、キリスト教の愛の教えに目ざめました。

一郎は出所後直ちに賀川氏を訪ね、教えを乞い、話を聞くうちに、

（自分にできることは政治の世界で貧しい人たちを救うことだ。）

と、思うようになりました。それから間もなく一郎は、キリスト教の愛の教えである「平和・平等・博愛」を胸に政界に乗り出し、町会議員や県議会議員に当選、昭和十二（一九三七）年の衆議院議員初当選以来、十七年間代議士を務めました。その間、厚生政務次官、衆議院仮議長に任命されています。また、昭和十二（一九三七）年から同二十（一九四五）年まで大河原町長も務めました。一郎の政治信念は、厚生、福祉を充実させることで貧困をなくそうというものであり、現に貧しい人々の救済に尽力しました。その功績を認められ、昭和三十七（一九六二）年九月大河原町議会で名誉町民に推薦され、満場一致で決議されました。

生涯を通して、人のために尽くした一郎の志は、今も大河原のいたるところに息づいています。

国会議事堂前の庄司一郎

①衆議院　日本の国会を構成する議院の一つ。
②苦学生　働いて学費や生活費を作りながら勉強している学生。
③学資　学問をするために必要な費用。
④講義録　講義を記録した物。
⑤聴講生　大学などの学生ではないが、特に講義を聴く資格を与えられた者。
⑥不敬罪　皇族（天皇の親族）などの一族に対し、その名誉を害するなど、うやまわない罪。
⑦えん罪　無実であるのに罪をきせられてしまうこと。
⑧内村鑑三　日本のキリスト教思想家・文学者・伝道者・聖書学者。
⑨ウェブスター大辞典　ブリタニカ国際大百科事典のことで、学術的に高い評価を得ている。
⑩賀川豊彦　大正・昭和期のキリスト教社会運動家。

※参考資料
・大河原町史諸史編
・庄司恭氏の記述によるもの

大泉（おおいずみ）　孝（たかし）
―教育ひとすじに身を捧（ささ）げ　大河原町名誉（めいよ）町民となる―

美しい賛美歌の歌声に包まれる中、おだやかな表情を浮かべた一人の紳士が眠るように横たわっています。故人の偉業をたたえ、最期の別れを告げようと集まった多くの人々に見守られ、聖イグナチオ教会で葬儀ミサが行われていました。その紳士の名は、大泉孝。キリスト教の信者として愛の大切さをうったえ、教育ひとすじに身を捧げた人生でした。

大泉　孝

大泉孝神父は明治三十五（一九〇二）年、大河原町に父大泉徳三郎、母ゑなの次男として生まれました。大泉家はカトリック信者であり、大泉神父の孝という名は、当時の大河原カトリック教会の伝道士が名付け親で、生後十七日目に函館のベルリオーズ司教からフランシスコ・ザベリオの名で洗礼を受けました。

孝が四歳の時、父徳三郎が死去し、孝は大河原町の町会議員を勤めていた伯父の福治に育てられることになりました。伯父夫婦に愛情を注がれながら育った孝は、小学校時代、学業は常に主席を通した反面、夏は白石川で泳ぎ回り、河原の兵隊ごっこではいつも隊長になるような腕白小僧でもありました。夕方になると、孝は同級生と共に担任の先

生の家におしかけ、宮本武蔵や岩見重太郎の話を聞かせてもらいました。学校の休日には、昆虫や植物採集のために先生と一緒に野山をかけめぐりました。先生のことが大好きだった孝は、先生が転任する前日、一晩中泣き明かしたといいます。晩年、孝は新聞に掲載された記事の中で「教育において最も大事なことは、教えるものと教わるものとの心の結び付きだとするならば、私達は良い先生に恵まれたものである。」と語っていました。

伯父大泉福治，うめ夫婦と孝，徳治郎兄弟（孝は写真中央）

白石川や蔵王連峰、館山や韮神山といった美しい自然に囲まれ、多くの人々から愛情を受けて少年時代を過ごした孝は、柴田農学校を卒業した後、宮城県農学校で獣医学を学びました。宮城県農学校に通っていた四年間、孝は仙台市にあるカトリック教会の中の家で生活をしていました。そこで出会ったのが、主任司祭であるモンタグ神父でした。優しくおだやかな、そして、雄弁なモンタグ神父は熱心に孝に教えを説きました。

「わたしもモンタグ神父のように、愛と真理を求めていきたい。」

いつしか孝は全身全霊をもってモンタグ神父を尊敬し、向学の志を立てるようになりました。

宮城農学校を卒業し、朝鮮（現在の韓国）で牛の病気である牛疫のワクチンの研究に取り組んだ後、孝は向学の志を果たそうと、大正十四（一九二五）年に上智大学に入学しました。二年後には大学から選ばれ、[1]イエズス会に入会するためにドイツへ留学することになりました。大河原町に帰郷、家族達に別れを告げ、三月一日に東京を出発、シベリア鉄道でドイツに向かいました。ドイツにあるエンメリッヒでイエズス会に入会し、ボニファ

チオ学院に入学しました。イエズス会の神父になるためには、哲学を学ぶ前の段階として、ラテン語、ギリシャ語、文学などを学ばなければなりませんでした。孝はここで約三年半勉強を続けました。ちょうどその頃、世界では政治や経済社会の混乱が加速していました。昭和六（一九三一）年四月にはスペイン国王が亡命し君主制が崩壊、日本では満州事変が起こっていました。

「なぜ人は憎しみ合い、傷つけ合うのだろう。どうしたら争いのない世の中になるのだろうか。」

孝は思い悩みながら、必死で勉学に励みました。

長い異国での生活は時に苦しいものでしたが、そのような時、孝はいつも故郷大河原を思い出しました。故郷を語る時、「白石川の流れと、蔵王の山…」というのが孝の口癖でした。

孝は昭和十三（一九三八）年九月、実に九年半の長きにわたる留学生活を終え日本に帰りました。大河原に帰郷した孝は大変な歓迎を受け、家族と十数年ぶりの再会を果たしました。昭和十四年には上智大学の教授に任命され、聖テレジア教会の主任司祭をも兼ねることになりました。

日中戦争が長引き、太平洋戦争が起きようとする中、上智大学では学長が外国人だったため、代わりに日本人が学長になりました。そこで孝は幹事として新学長を補佐することになりました。太平洋戦争が始まると、防空訓練、野外教練、勤労動員などで学生は勉強だけしていられなくなりました。後には軍需工場で勤労報国隊として働き、授業は全くできなくなり、また、学徒動員で戦場に赴く学生も多くなりました。昭和二十（一九四五）年になるとアメリカ軍の空襲が激しくなり、四月十三日の空襲によって上智大学も全焼してしまいました。八月十五日、日本は敗戦し、戦争は終わりましたが、東京の大半は焼け野原となっていました。

一面の焼け野原を眺めていた孝の胸に熱い思いがこみ上げてきました。

「もう二度と戦争をしてはならない。そのためにも、今こそ愛を説き、未来を担う人を育てていかなくては。」

やがて学生も次々と復員し、上智大学も十月二十五日から再開しましたが、軍服姿の学生も多く、施設の不備はもちろん、教授も不足し、教科書もない状態でした。学生、職員の住宅難、食糧難など、何もかも混乱から復興させなければなりませんでした。孝は十二月から副学長になり、これらの問題に全力で対処しました。

昭和二十八（一九五八）年、ついに学長になった孝は、それからも大学の発展のために力を尽くし、上智大学創立五十周年を祝った時には、上智大学は六つの学部を有する、学生数五千人の大学となっていました。

孝はその高い学識能力が認められ、文部省（現在の文部科学省）、厚生省などの審議会や委員会、また私学関係の委員や役員を数多く勤めました。孝が勤めた主なものとして、大学設置審議会、教育職員養成審議会、日本ユネスコ国内委員会、人口問題審議会、日本学術振興会、放送大学設置に関する調査研究会議、大学基準等研究協議会、ＮＨＫ宗教放送委員会、日本私立大学連盟、全私学連合、海外と文化を交流する会などがあります。特に昭和四十七（一九七二）年の第十期中央教育審議会では会長職を勤め、国際的に信頼され尊敬される日本人の育成を目指して、教育・学術・文化の国際交流について熱心に取り組みました。

昭和４０（１９６５）年１１月
ロバート・ケネディ米国上院議員夫妻上智大学を訪問

上智大学創立５０周年記念式典にて式辞を述べる大泉学長

昭和三十六（一九六一）年、大泉孝神父は西ドイツ連邦共和国（現在のドイツ連邦共和国）から、日本とドイツの文化交流に尽くした功績により勲章を受けました。また、翌年には、学生の教育に尽力するとともに、広く教育行政に貢献したとして藍綬褒章を、ついで勲一等瑞宝章を受章しました。勲一等の勲章を受けた人は、宮城県関係では非常に少なく、大河原出身の大泉神父が勲一等を受けたことは町の名誉であるとして、大河原町は神父を名誉町民として迎えました。

「愛は永遠に隕ちず」

孝の理想は、この言葉とともに、今も多くの人々に受け継がれています。

---

① キリスト教、カトリック教会の男子修道会。教育活動を主な活動の一つとしている。

② 君主（王、皇帝など）が治める政治のあり方。

※参考文献

・「愛は永遠に隕ちず」大泉孝十周忌記念誌編集委員会

大河原町における叙勲記念祝賀会の後
親族とともに

村井江三（むらいこうざん）―松尾芭蕉（まつおばしょう）にあこがれて―

「先生、句ができました。どうでしょうか。」

「うむ、なかなかいいできだな。今後も自然を見る目を養っていくのだぞ。」

「先生、わたしが書いた字を見てください。お願いします。」

「まずまずよく書けている。筆の入りがなかなかよい。払（はら）いの部分はこのようにするとさらによい。」

江戸時代後期、ある①寺子屋での一風景です。

この当時、大河原で一平民が寺子屋を開いたのは、村井江三ただひとりでした。江三は二十歳の頃に寺子屋の先生になり、多くの庶民（しょみん）に書道や俳句を教え、門人から寺子屋を開設するものも輩出（はいしゅつ）しています。

村井江三は、寛政八（一七九六）年、大河原村本町（現大河原町本町）に生まれました。本名は村井平治。俳句を書く時には「一日庵江三（いちにちあんこうざん）」という②号を称（しょう）しました。小さい頃から勉強を好みました。特に、江戸の文学に興味を持ち、俳句を愛し、松尾芭蕉にあこがれを持ち続けた少年時代を送りました。

（自分も芭蕉のようになりたい。すばらしい句を作ってみたい。）

（芭蕉のように、日本全国を旅してみたい。）

いつもずっと考えていました。

二十歳を過ぎて、寺子屋で門人たちに書道や句を教えている間にも、その思いはどんどん強くなっていきました。二十五歳の時に江三はついに③俳諧修行の旅に出ました。山形や会津を経て、新潟、富山、福井などを周遊し、京都や子どもの頃からあこがれていた江戸にも滞在しています。京都では二条殿下から目をかけられ、時々、自分の書いた句を見てもらいました。その時の句「早乙女や足も洗はで夕かしぎ」に、殿下は大変感動し、「陸翁遊人」という俳号をもらっています。三十五歳で大河原に戻るまで、旅をしながら江三は芭蕉の句を追求し続けます。この旅を通して、江三は中央俳人とのつながりを持ち、自分の句を見つめ直したのでした。

江三が活躍していた江戸時代後期は、庶民の間にも俳句を楽しむ気運が少しずつ高まってきました。その当時に活躍した多くの俳人は、④与謝蕪村の流れをくみ、美感覚にとらわれていましたが、江三はあくまで芭蕉の作風を愛し、自然や風景の中に感じられる⑤わびさびにこだわり続けました。修行の旅から戻った江三は、近隣の角田や柴田、山形などで多くの句会を開き、仲間や門人との交流により少しずつ周囲からの敬愛を集め、自分が求める句をさらに追求していきました。

江三は、四十代なかばから七十歳になるまで、多くの俳人の句を集めていくつかの歌集を編集しました。江三が編集した歌集には、「筆塚集」（一八四〇）、「草つき」（一八四六）、「三月越集」（一八五九）、「続月夜塚集」（一八六七）などがあります。また、芭蕉を

韮神山の句碑

敬愛してやまない江三は、五十二歳の時に芭蕉の足跡をたどり、芭蕉自身の句を刻んだ句碑を私財を投じて建立しました。その句碑には、

鶯の　笠落としたる　椿哉

と、刻まれています。その句碑は現在も韮神山に残っており、誰もが見ることができます。句碑の建立の記念として、自分自身の句集「うぐいす笠」も発刊しています。

俳諧での活躍や功績とは裏腹に、江三の晩年は寂しいものでした。⑯家督の吉兵衛が財産や家屋敷を無くし、隣の相馬屋の二階に一室を間借りし、物質的に貧しく⑦隠遁的な生活を送りました。

辞世の句に、

幸や　此年の花も　見つくして

とうとうに　死ぬ節の来る　青葉かな

というものがあります。病の床で自分の死を覚悟したのでしょう。自分の志を持ち続け、後に東北の三俳聖と呼ばれるようになる村井江三は、明治三（一八七二）年五月二十八日、七十八歳でその生涯を閉じました。大河

繁昌院の山門

原の繁昌院に墓があり、その墓碑（ぼひ）には「一日庵江三一舟居士（いちにちあんこうざんいっしゅうこじ）」と刻まれています。

---

① 寺子屋　江戸時代、庶民の子供に読み、書き、そろばんを教えた初等教育施設。
② 号　学者、文人、画家などが本名のほかに用いる名。
③ 俳諧　俳句や連句の総称。
④ 与謝蕪村　江戸時代中期の日本の俳人、画家。
⑤ わびさび　日本の美意識の一つ。一般的に質素（しっそ）で静かなものを指す。
⑥ 家督　その家の跡継ぎのこと。
⑦ 隠遁的　俗事を捨てて、ひっそりと隠れ住むような様子。

※参考資料

・「仙台叢書」　復刻版発行者　鈴木武夫　宝文堂出版
・ＤＶＤ「大河原の俳人　村井江三」　大河原町編集

高橋与右ヱ門 ―大河原の発展に尽くした高忠屋―

（うーん、何とかせねば・・・）

天保九（一八三八）年、父忠助が、①大飢饉で苦しんでいる人々を助けたり、亡くなった人を供養したりして、仙台藩より飢饉義捐褒賞者として表彰された頃から忠次郎（与右ヱ門）は、（人々が飢饉に負けず生活ができるようにしていかなければ…）と、考えるようになりました。

父忠助は、初代となる監物豊茂が戦国時代の文明元（一四六九）年、乱を逃れて京の都から金ヶ瀬②薬師堂に移り住んでからの十三代目で、先代から紅花商を継ぎ、③紅花や藍の商いを広げ、財を成していったのです。

紅　花

紅花と言えば、山形県村山地方の河北町が有名ですが、ここ仙南地方の紅花も有名で、品質は日本一と称されていました。

♪　青麻山から阿武隈みれば　黄金花咲く紅の花
わたし紅花京都の育ち　早く行きたい里帰り
白い布地に紅花染めて　可愛い我が子のお腰巻き

高橋家３代肖像画
忠助・忠次郎・寛之助

このような「紅花摘み唄」が残っているほど盛んでした。

忠次郎は、雅号・梅柳の名を持ち、父親忠助共々、大河原の俳人村井江三の門弟でもあり、文人への支援を行い、地域文化の発展にも寄与していました。

嘉永五（一八五二）年、忠次郎は、柴田郡紅花④差配人に任命され、紅花の商いを任されるようになりました。時に、父忠助五十二歳、忠次郎三十歳でした。

二年後の安政元（一八五四）年には、伊達川崎公の公用人となりました。川崎の人々の生活を豊かにしていこうと、川崎野上間の道路と側溝排水を整備し、紅花栽培ができるように計画を立て、家老の了解をいただきました。総工費⑤七千六百両の不足分をご用立ていただこうと、庄内酒田の本間様のもとへ出かました。いったんは願いを受け入れてもらいましたが、少しの手違いにより用立てていただけず、計画は流れてしまい、忠次郎の思いはかなえることができませんでした。

翌年二月、江戸回りで大阪、そして京へ運んでいた⑥六十駄の紅花が、江戸商人組合に差し留められ、訴訟となってしまいました。差配人である忠次郎は駆けつけ、江戸南町奉行所に訴状を提出し、四月二十三日、裁判に臨みました。そして、忠次郎のすばらしい受け答えによって、⑥一丸につき一分二里支払い検印を受け、あとは従来通りという裁決を勝ち取りました。裁きが終わり、

「お奉行様はじめ、お役人ご一同様に申し上げます。この度の紅花の件につき、永らくの間ご心労を相わずらわし、お陰様をもって只今お裁きを頂いた通り、円満のご解決を頂き誠に御礼申し上げます。東條様、熊谷様、ご名主の方々、最後までの心ぞえ重ねて御礼申し上げます。」

と述べ、深く頭をたれ、訴訟は落着。閉会となりました。

安政五（一八五八）年一月、父忠助が柴田郡南方⑦大肝入に就任したため、⑧検断役を辞任しました。しかし、三年後の文久元（一八六一）年二月には、父忠助が⑨還暦を過ぎたことを機に大肝入を退く決心をしたため、忠

紅花摘み

次郎が大肝入に就任する運びとなりました。時に忠次郎、三十九歳でした。

（そうだ。よし、やるぞ。）

忠次郎は、困窮する人々を紅花で救えるよう、使用人を百姓に雇い入れられないかと、かねてから考えていた新田開発を翌年の文久二（一八六二）年、実行に移しました。島崎（現小島）屋敷に家屋、厩、物置等を建てるとともに田畑も与え、本百姓として十人を雇い入れ、人々の生活が営めるようにしたのです。完成の折、新百姓は、

「私たちは、（・・・中略）御当家ご主人様のお計らいと、お許しくださった御代官様のお陰様にて、新百姓となり、立派な家に住まうことになり、なおたくさんの耕地を頂きこの上ない喜びでございます。私たちは今後とも今までのように高忠さんのため働きますので、何卒よろしくお願い申し上げます。」

と、御礼を述べています。

現在の小島

文久三（一八六三）年、仙台藩の学問の府「養賢堂」の学頭、大槻磐渓先生から、（薬師堂のいわれを書き残しておきたい）という依頼のもと、石碑を建立することになりました。磐渓先生の書き上げた碑文の中には、高橋家先祖と薬師堂とのかかわりも記されていました。

しかし、翌年の元治元（一八六四）年四月八日、父忠助が病により亡くなり、忠次郎は、二代目忠助を継いだのですが、その矢先、病に倒れ、六ヶ月も経たない十月一日、亡くなってしまい、その薬師堂碑は幻に終わってしまいました。父忠助六十四歳、忠次郎四十二歳でした。

この時、忠次郎の息子、三代目忠助となる寛之助（豊久）は、まだ十四歳で、紅花差配人を継承することができず、紅花商いを続けることができませんでした。またこの年には、⑩蛤御門の変のため、紅花の売買は難しくなり、四年後の⑪戊辰戦争、そして明治維新を迎え、殖産興業の推進、生糸の輸出により養蚕業が盛んにな

り、紅花栽培は衰退（すいたい）していったのです。三代目忠助は、雑貨商・麹（こうじ）製造を営み、どうにか商売が安定してくると、大河原村の戸長や町助役、二代目町長を務め、大河原のために尽くしました。また、後年、謡曲（ようきょく）を百数十人もの門弟に教授しました。その功績をたたえ、「高橋翁頌徳（しょうとく）碑」が最勝院（西の寺）内に建立されました。現在は、薬師堂境内に移築されています。

紅花商で財を築いた高橋屋忠助。高忠家がもたらしたものは、単なるお金だけでなく、大河原そして仙南地方の経済・文化の発展という大きなものでした。今の大河原地区の姿があるのも、高忠家はじめこのような人々の活躍があったからなのです。

---

①天保の大飢饉　天保四（一八三三）年の洪水（こうずい）をきっかけに七年にわたり、日照りや洪水、冷害が重なり、農作物が不作、食物欠乏により二・三十万人の餓死者や病者が出た。

②薬師堂　大高山大林寺の管理する仏堂「善逝堂（ぜんせいどう）」とも言う。板碑が13基。中でも文保二（一三一八）年の碑は柴田郡内最古。大ひでりの際、与右ヱ門がもって祈願し雨を降らせた故事により、「雨乞（あまごい）薬師」とも言われている。

③紅花　キク科の一年草。黄紅色の筒状花。口紅や衣服の染料、漢方薬の原料。種蒔期四月上旬。花期七月。アザミに似て先端にトゲがある。栽培地は川沿いの場所が最適。江戸時代・享保年間全国生産量の41％が山形。それに次ぐ25％をここ仙南地方が栽培。

④差配人　藩の紅花を一手に取り仕切り、藩の意向を反映させるための役。

⑤七千六百両　幕末の一両を一万円とすると現在の七千六百万円相当。

⑥一丸・六十駄　一丸（1袋五百匁16袋・8貫30kg）一駄（4丸32貫・120kg）が天保年間で四十両。仙台南物は、百～百十両で取引。

⑦大肝入　村・宿場の最高役職に任命された者。藩の規則を住民に守らせるため、様々なことを仕切ったり、住民の相談に乗ったり、時には仕事を与えたりする世話役人のこと。大庄屋、大名主も同じ。

⑧検断役　宿駅関係の一切の仕事を取り締まる職務。

⑨還暦　六十歳　六十年で干支が一回りして還ることから。

⑩蛤門の変　（禁門の変）長州藩が京に出兵し、京都守護職会津藩と戦い敗れた。

⑪戊辰戦争　慶応四（一八六八）年～明治二（一八六九）年、明治政府を樹立した新政府軍（薩長が中核）と旧幕府（奥羽越列藩同盟）との戦い。会津の戦い、白虎隊でも有名。仙台・仙南この地にも影響。

薬師堂

※参考資料

・「紅花物語」高橋忠助著　観光堂書店
・「大河原町史」
・「写真に見る大河原町誌」
・「紅花のおもかげ」高橋武彦著

田中　實（たなか　みのる）
―私しか作れないお菓子を目指して―

「仙台の名物となる『うちだけの名物』を作ろう！」

宮城県のお土産（みやげ）といえば、必ず名前が挙がるのが「萩の月」です。この萩の月を考案した「菓匠三全（かしょうさんぜん）」の創始（そうし）者田中實は、「常に新しいもの」「だれもまねできないオリジナルなお菓子」を作ろうと日々研究を重ねました。失敗してもあきらめず、努力を惜（お）しまず研究を続けた實の業績は、今も語り継（つ）がれています。

實は、明治四十三（一九一〇）年、福島県伊達郡半田村（現在の桑折町（こおりまち））に生まれました。小さい時から明るく元気で、勉強は常にクラスで一番、毎年学級委員を任されるほどのクラスの中心的存在となりました。

勉強が好きだった彼は、師範（しはん）学校（先生になるための学校）を卒業して小学校の先生になりました。教師になった實は、（生徒にとって分かりやすい授業とは何だろう）と日々研究しました。研究熱心だったことから、もっと高い知識を得るために東京物理学校で勉強をやり直そうと決意し、毎日一生懸命勉強に励（はげ）みました。東京物理学校卒業後は、戦時中だったこともあり、飛行機を探知（たんち）するレーダーの研究に取り組みました。そして、研究に研究を重ねた結果、高性能のレーダー開発につながる研究に成功しました。生産の

田中　實氏

めどもつき、仲間たちと大喜びしたのもつかの間、仙台空襲により資料も家財も丸焼けになってしまいました。

「ああ、私はどうしたらよいのだ・・・・。」

戦争が終わった今、戦闘機もレーダーも必要ありません。家族を養っていかなければいけない實は、

（まずは食べ物を手に入れなければ・・・・。百姓だ。農業を始めよう！）

と思いつき、蔵王町に移り住みます。朝から晩まで一生懸命働いた實でしたが、生活は大変苦しいものでした。そこで、何か商売をしようと考えました。当時は甘いものが貴重でよく売れることに気づき、飴を作って売ることにしました。米と発酵させた大麦での飴作りからヒントを得た實は、米の代わりにさつまいもで飴を作ることを思いつきました。

（これが売れるとよいのだが・・・・。）

不安を胸に売りに行った遠刈田温泉では、

「うまい！」

「明日ももってきてね！」

と絶賛され、實の作ったさつまいも飴は飛ぶように売れるのでした。實は、もっとおいしく、見た目もよい飴を作ろうとさらに日々工夫を重ねました。ところが、原料をさつまいもなどから水飴に切り替えたとき、色や形などがうまくできないことがありました。そこで實は、はるばる東京まで行き、一週間ほど宿屋に泊まりながら飴工場の多い東京錦糸町の現場を外から見て、飴の伸ばし方、丸め方、はさみでの切り方などを目で覚えました。

昭和二十八（一九五三）年、交通の便を考えて大河原町に移り住むことにしました。工場も「田中飴屋」

から「田中製菓工場」と改め、新天地でのスタートを切りました。大河原町に来てからは、かりんとうを作って売ることにしました。おいしいかりんとうを作るために毎日試作に明け暮れました。物理学校で学んだ實は、常に失敗の原因を科学的に分析し、とことん究明した後、いくつかの方法を考えて実験しました。常に「やつさない（手抜きや粗悪な材料を使わない）」ことを信念として貫きました。そして、

「どこよりも一歩優れたおいしいお菓子を作ろう！」

と、早朝から深夜まで「研究、仕事」になりふり構わず没頭しました。

六十歳を迎えた年。實は、

（これからは原子力利用の科学の時代だ。物理学校時代に研究した知識を生かしてお菓子以外の何かの事業をしよう。）

と思い立ち、銀行にお金を貸してもらうよう相談に行きますが、断られてしまいました。そこで、物理学校時代の友達二村富久氏の所へ行き、相談をすることにしました。二村氏は、

「全国にはたくさんのかりんとう屋がある。同じ業種が競争するから行き詰まってしまう。君は昔、優秀な学生だった。よく考えて人がまねできない独特のお菓子を作るんだ。」

と、實に話しました。

（人がまねできない独特のもの・・・・。）

實は考え込みました。帰りの列車の中、宇都宮で、

「宮の餅、宮の餅！」

家族や会社役員とともに

という売り子の声を聞いた實は、

「宇都宮名物の餅のことか・・・。そうだ。これだ！」

大河原に戻った實は、息子と共に「仙台名物」と呼ぶことのできるお菓子の開発に夢中になって取り組みました。材料の吟味、そして、若者にもお年寄りにも食べてもらえるように味を考えること、さらにパッケージやネーミングにもこだわることで仙台名物としての特色を出そうとしました。仙台といったら伊達政宗公が有名です。勇壮な騎馬姿の政宗公をあしらった包装紙と格調高い黒の外箱と金の内装で、「仙台銘菓」と呼ぶにふさわしいものが完成しました。こうして完成した「伊達絵巻」でしたが、最初は、

「そんな聞いたことのないお菓子は売れない。」

と駅やデパートで断られてしまいました。しかし、

（材料にもこだわっているし、食べてもおいしい。このお菓子が売れないわけがない。）

と、地道な宣伝活動を行いました。すると徐々にそのおいしさは知られるところとなり、爆発的な売れ行きを見せました。

實は、これにおごることなく、「常に新しい商品を開発していこう」「次はどんなお菓子を作ろうか？」と考えました。アンケートを行うことでお客さんがどんなお菓子を求めているか考えるなどの努力もしました。そして思いついたのが、「日持ちのするおいしいカスタードクリームのお菓子」です。柔らかいカスタードクリームをふんわりしたカステラで半球型に包んだお月様のようなお菓子です。科学への志から転身して、身につけてきた三十年の技術の粋を、この一品に注ぎ込もうとする情熱には鬼気迫るものがありまし

モンドセレクションを受賞する田中實氏

た。一年間にわたって粘り強く実験を繰り返し、製品を仕上げることができました。そうして生まれたのが、「萩の月」です。

また、「萩の月」を大量生産して販売するには、「日持ち」させることが重要でした。實は、お菓子としての安全性と味を常に最優先し、何とか保存料を使わずに日持ちをさせる方法を考えました。これが大変難しいことでした。仕事のかたわら、三菱瓦斯（がす）化学という会社と協力して、お菓子に保存料を使わず、おいしさをそのまま保つことができる①脱酸素剤の研究に没頭（ぼっとう）しました。何度も何度も実験し、失敗してもあきらめず研究を重ねた結果、「エージレス」という極めて優れた脱酸素剤の共同開発に成功しました。このエージレスのおかげで、萩の月は全国に広まりました。

その後も實は、「人がまねのできないお菓子」作りに情熱を燃やし、次々と新しいお菓子を開発しました。また、消費者の意見にも耳を傾け、世の中のニーズに合った新しいお菓子を作ろうと常に考えました。後に、世界でも権威（けんい）のあるモンドセレクションをはじめ、いろいろな賞を受賞するお菓子を作り上げることができました。實が亡くなった今も，彼の作ったお菓子は人々に愛され続けています。

---

① 包装の中の酸素を鉄などとの反応で取り除くもの。カビ、酸化による変質を防ぐ。主に食品包装で広く利用されている。

※参考文献

・「一掬いの飴から　菓匠三全　五十年史」

・「わが道」

三宅（みやけ）義信（よしのぶ）・義行（よしゆき）
―偉業（いぎょう）を成しとげた三宅兄弟―

三宅義信氏

（一）兄　義信

三宅義信は、昭和十四（一九三九）年村田町沼辺（ぬまべ）に七人兄弟の五番目として生まれました。家はとても貧しく、食べる物は、じゃがいもやさつまいも、大根の葉っぱばかりで、米を食べることはなかなかむずかしい生活でした。

沼辺小学校（現村田第二小学校）、沼辺中学校（現村田第二中学校）ですごした少年時代は、家計を助けるためにアルバイトもしなければならないため、友達と遊んだりクラブ活動に参加したりすることはできませんでした。新聞配達を始めた義信は、母に、

「きちんと責任をもって遅れないように配りなさい。あとは自分で考えなさい。」

とだけ言われ、任されました。母の教育は、何事も目標やヒントだけ与えて、あとは自分で考えさせるというやり方でした。この教育方針のおかげで、義信は自分で目標を定めて、それを達成するために工夫して障害を乗り越えていく力を身に付けることができました。

大河原高等学校（現大河原商業高等学校）へ進学してからも、相変わらずのアルバイト生活で、これまでと同様、クラブ活動などを行うことはできませんでした。しかし、高校二年の夏、義信の運命を変える出会いが訪れ

ました。近所の先輩に誘われて見学した柴田農林高等学校重量挙部。そこで初めて重量挙げというスポーツに出会ったのです。監督に自分から声をかけ、重量挙げを体験させてもらうと、ときどき重量挙部を訪れるようになりました。その頃に、当時、仙台に来ていた早稲田大学の体育心理学者マーチン先生に出会います。先生は、義信の体を見るなり、

「あなたは胴が長くて足が短いし、胸板も厚い。重量挙げに向いた体型ですね。素質があるからがんばってやりなさい。」

と、言われました。この一言で、義信は、（ようし、がんばってみよう！）と、毎日欠かさず練習に通うようになり、めきめきと頭角を現し始めたのです。

全国高等学校総体で五位入賞し、その後、より高いレベルを求めて、法政大学に入学しました。記録が伸び悩んだ時期もありましたが、記録は徐々に伸びていきました。ところが、大学三年生のときに、オリンピックにはこれまで出場していた①フライ級がないことを知らされます。オリンピックに出場するためには、これまで活躍していたフライ級からバンタム級へと、体重の重いクラスに上げなければなりませんでした。そこで義信は、猛練習の合間に、力仕事のアルバイトを行って自ら体を野性的にきたえました。その結果、昭和三十五（一九六〇）年第十七回オリンピックローマ大会に出場し、銀メダルの栄冠に輝くこととなりました。義信は言います。

「競技は力のみにあらず、精神力にある。その精神は不断の猛練習の努力の中に宿る。」

と。

大学を卒業すると、さらによりよい練習環境を求めて自衛隊に入り、昭和三十九（一九六四）年に行われた第十八回オリンピック東京大会では世界新記録で優勝し、念願の金メダルを手にするとともに、多くの国民に夢と感動を与えました。さらに、昭和

東京大会金メダル第１号に

四三（一九六八）年の第十九回オリンピックメキシコ大会でも金メダルを獲得して二連覇を達成し、第三位となった弟の義行とともに表彰台に上るという、史上初の快挙を成しとげたのです。

三連覇をめざして出場した昭和四十七（一九七二）年第二十回オリンピックミュンヘン大会では、本番の一週間前の時点で調子のピークがきてしまい、ピークの過ぎた七月二十九日の本番では力を出し切れず惜しくも第四位でしたが、この間、オリンピックをふくめた世界大会六連覇を成しとげ、世界記録を二十七回も更新しました。義信が長い間世界のトップであり続け、四度もオリンピック出場を果たしたという事実は、まさしく世界のスポーツ界に残るきわめて優れた功績であるといえます。

現役を引退した後は、「おれがやらねばだれがやる、今やらずしていつできる」の言葉をモットーに、若い選手の育成に力を尽くし、指導者としての道を喜んで歩んでいきます。

子どものころは、家が貧しいことをからかわれ、けんかをすることもたびたびあった義信でしたが、自分の夢と信念をもち、最後まであきらめずに努力し続ける姿勢をつらぬいたからこそ、このような偉業を成しとげることができたのです。

三宅義行氏

メキシコ大会にて

（二）弟　義行

三宅義行は、昭和二十（一九四五）年に生まれました。六歳年上の兄は、後にオリンピック東京大会とメキシコ大会で金メダリストとなる三宅義信です。

重量挙げですばらしい成績を収める兄の姿を追いかけ、高校に入ると、義行も重量挙げの世界に飛び込みました。義行が入学した大河原高等学校（現大河原商業高等学校）には、当時、重量挙部がありませんでしたが、自らウエイトリフティング部を作り、兄に追いつこうと厳しい練習を始めたのです。

その後、義行はどんどん力をつけ、大学に入ってからは数々の記録を残しました。そして、一九六八年に行われたオリンピックメキシコ大会で銅メダルを取り、金メダルの兄義信とともに表彰台に立ちました。スピードとパワーで兄に勝る義行は、翌年のワルシャワ世界選手権でも優勝。さらに、リマ世界選手権でも優勝しました。オリンピックミュンヘン大会（一九七二年開催）前に行われたプレオリンピックでも優勝し、世界王者の兄をして、

「まもなく義行の時代が来る。」

と言わせるほどの活躍でした。

しかし、オリンピックを五ヶ月後に控えた三月末、練習中に右足じん帯を切る大けがを負いました。その後、奇跡的に復活し、オリンピック代表選考会に臨みましたが、けがの影響は大きく記録は伸びずにオリンピック出場権を逃してしまいました。足のけがで思うように練習できないことがストレスとなり、そのストレスの影響で、胃かいようになってしまいます。胃かいようの手術は、胃の大部分を切り取るもので、四時間半にも及ぶ大手術でした。それでもくじけずに手術後には練習を再開しましたが、手術の傷あとが影響し、思うようにバーベルを挙げられないことから、「再びオリンピックの表彰台へ」という夢をかなえることができないま現役を引退しました。

引退後、何を目的に生きるかを日々考えながら過ごす義行でしたが、長女の宏実が、父の背中を追って重量挙

メキシコ大会にて

げの世界に入ることをきっかけにして、再び義行の「重量挙げ魂」に火をつけることになりました。今度は、長女宏実のコーチとして、再び重量挙げの世界に戻ることになったのです。十年以上、二人三脚で練習に励み、平成二十四年（二〇一二）年に開催されたオリンピックロンドン大会で、宏実は、見事日本新記録で銀メダルを獲得しました。親子二代でオリンピックメダリストとなったのです。そして義行は、ふるさと村田町の子どもたちへ、

「大きな夢をもって、長く続けてほしい。一生けんめいやれば、必ず大きな答えが出るから。」

と、言葉を送っています。

兄に勝るとも劣らない力をもちながら、けがや病気に夢を絶たれた義行でしたが、よき父、よきコーチとして、夢を受け継いだ長女と二人三脚で歩み、とうとうその夢をかなえることができました。

---

① フライ級（49～52kg）　バンタム級（52～56kg）　一九七七年以前。それ以降は数量値になった。

※参考資料

・「バーベル人生」三宅義信　善本社・昭和48年
・「オリンピックに賭けた人生（ゴールドメダリストの夢）」三宅義信　ジアース教育新社・平成13年
・志教育参考資料「大河原教育事務所管内の偉人Ⅰ・Ⅱ」平成24・25年
・村田町歴史みらい館

佐藤源三郎 ―大河原小学校を再建しよう―

上町にある大河原町中央公民館の隣に、昔の蔵門のある家があります。これは、古くから醤油工場を持っていた佐藤屋の屋敷です。佐藤屋の初代権右衛門は、山形県米沢の人で、上町の須藤屋という店で働いていました。その後、①のれん分けをしてもらって独立し、嘉永三（一八五〇）年、四代目源三郎の時より醤油づくりを始め、佐藤屋を発展させました。それを引き継いだ五代目源三郎は、醤油づくり以外にも手広く商売をしていました。

若い頃には、醤油を馬に載せて亘理町や白石まで行商に歩いていました。よく働き、みんなの信頼も厚かったので、柴田郡の議員になったり、郵便局長になったり社会的にも活躍するようになりました。また、多くの農地を持ち、たくさんの小作人に土地を貸していました。源三郎は、五百人もの小作人を集めて、米の品評会や講習会を開き、いい米をたくさん収穫する努力もしています。そして、多くの困った人に救いの手を差し伸べていました。

5代目源三郎

佐藤屋亭

大河原小学校には、火事の様子が描かれた大きな絵が飾られています。昔から校舎内に飾られている絵です。実はこの絵、大河原小学校の火事の様子を描いたものです。たくさんの人が、火災から逃れようと走っています。中には、校庭に机やいすを運び出している人もいます。また、煙を見ると、とても強い風が吹いていることがわかります。

大河原には昔、「㉔軽便鉄道」という鉄道が通っていました。昔の汽車ですから、石炭をたいて、もくもくと煙を吐き出しながら走っていました。汽車の煙突からは、煙とともに火の粉が飛ぶこともありました。

西風の強かった大正七（一九一八）年三月十三日。恐れていたことが起きました。火の粉が風に乗って民家の屋根に飛んで火事になったのです。火は風にあおられて、大河原小学校の建物にも移りました。真っ赤な火はみるみるうちに広がり、木造だった校舎は、あっという間に炎に包まれました。集まった人々は懸命に消火活動に取り組みましたが、そのかいもなく、校舎は全焼してしまいました・・・。

それまで学校に通っていた子どもたちはもちろんこと、大人も大変困ってしまいました。千人余りのたくさんの子どもが通学する大きな小学校だったので、再建するには多くの費用が必要です。子どもの教育の大切さを知る人々は、何とかしなければならないと考えました。その時、立ち上がったのが五代目源三郎でした。

源三郎は、明治六（一八七三）年に結婚しましたが、その結婚記念として、当時新築中だった大河原小学校の建築のために十円（今のお金にすると四～五十万円くらい）を寄付しました。その後、大河原村の議員になる

大河原小学校消失の絵（作 佐藤広治氏）

とさらに百円も寄付したのです。そんな縁もあって、大火事の次の日には、学校再建のために一万円を寄付しました。大正時代のこの頃の一万円は、今のお金にするとおよそ一千万円にもなるという大金です。さらに、人材の育成に熱心だった人々の協力を得て、火事から二年が過ぎようとする頃に新しい校舎が完成したのです。

源三郎は、明治四十一（一九〇八）年にも、現在の柴田農林高等学校の建築のために上川原の自分の土地を、学校の敷地用にと寄附しています。

現在の大河原町の基礎を作って来た人々はたくさんいますが、佐藤源三郎もその一人です。五代目源三郎は、教育や農業など、多くの分野でこの大河原のために尽くした人でした。

---

① のれん分け・・・奉公人や家人に同じ屋号の店を出させる（出すことを許可する）こと。

② 軽便鉄道・・・・線路の幅が狭く、機関車・車両も小型の小規模の鉄道のこと。

③ 頌徳碑・・・・徳をたたえた文などを刻んだ石

佐藤源三郎③頌徳碑

※参考資料

・「守愚」佐藤源三郎追想録

尾形亀之助 ―大河原が生んだ天才詩人―

尾形亀之助は、明治三十三（一九〇〇）年、大河原町八十四番地に、尾形十代之助の長男として生まれました。

夏

空のまん中で太陽が焦げた
八月は空のお祭りだ
何とすましこんだ風と窓だ
三色すみれだ

秋

円い山の上に旗が立っている
空はよく晴れわたって
子ども等の歌が聞こえてくる
紅葉を折って帰る人は
乾いた道を歩いてくる
秋は綺麗にみがいた
ガラスの中です

尾形家は、東北でも指折りの地主で、酒造業と販売でもたいへん栄えていた資産家でした。亀之助の曾祖父にあたる初代尾形安平は、大河原駅を①誘致したり、白石川に橋を架けたりなど、街の発展のために巨額の資金を投じた人物です。現在でも、大河原駅前の「尾形丁」「尾形橋」などにその名前が残っているほどの②名士の家柄でした。

尾形亀之助

上の詩は、大正十四（一九二五）年、亀之助が二十五歳の時に出版した第一詩集「色ガラスの街」に収められているものです。亀之助は、四十二歳で亡くなるまでに、三編の詩集を出しています。中でも、「色ガラスの街」は、亀之助の繊細な感性が一番色濃く出ている詩集です。

亀之助の詩は、夢とも現実ともつかない不思議な空間の中にあります。それは暖かく、透明な空間です。空の色や風のにおいに微妙な季節の変化を感じ、巧みな比喩で明るく軽やかに表現しています。亀之助の言葉は、

およそ現実的ではないのに、なぜだかとてもリアルに、自分の気持ちに素直に生きる一人の人間の言葉として心に迫ってくるのです。

九歳の時に一家で仙台に転居し、亡くなるまで大河原には戻らなかった亀之助ですが、この詩集には、大河原で過ごした幼年時代のきらきらした思い出の断片が感じられます。

当時の酒造業では、お酒を量り売りや樽売りにしていましたが、亀之助が生まれる少し前、尾形家はガラス瓶詰めの清酒「梅が香」を発売し、大当たりをしたそうです。しかしその後、しだいに尾形家は衰退し、晩年の亀之助は、貧困の中で詩作を続けることとなったのです。「無題詩」という詩は、亀之助の③原風景ともいうべき大河原の生家の記憶とも思われます。ガラス瓶の中で反射する光に幼年時代の豊かで幸せな思い出を見ていたのかもしれません。

生きているときにはあまり名を知られなかった亀之助ですが、詩人の草野心平や宮澤賢治、高村光太郎、正岡子規など、素晴らしい文人たちと親交があり、その才能を認められていました。大河原町が生んだ天才詩人尾形亀之助は、今、生まれ故郷に帰り、尾形橋の近くにある繁昌院で静かに眠っています。

詩集「色ガラスの街」

---

① 誘致…招き寄せること。
② 名士…広く名前を知られている人。
③ 原風景…心の中の懐かしい風景。

※参考資料

・「単独者のあくび　尾形亀之助」吉田美和子著

無題詩

からビンの中は
曇天のような陽気でいっぱいだ
ま昼の原を堀る男のあくびだ
昔
――――
空びんの中に祭りがあったのだ

太田麻之助 ―全国に知られた裏作の里をつくった―

裏作自慢の田圃には　れんげ菜の花麦の波
ゆたかに稔った穫り入れに　苦労わすれた笑い顔　（大河原町観光歌二番より）

戦後間もない頃、農作物の増産に尽くした太田麻之助は苦労を分かち合った仲間とともに右の歌を声高らかに唄ったことでしょう。

太田麻之助は、明治二十四（一八九一）年に村田町に生まれ、昭和五十二（一九七七）年、八十五歳で亡くなるまで一生涯、大河原の農業を盛んにするために力を尽くした人です。農作物の収穫を増やすことや農家の生活向上を目指し、大河原産業組合をつくり、その代表として自ら実践しながら、農業の①振興や農家を熱心に指導してきました。

太田は、農家の収入を増やすため、今までの米作りだけの農業を変えようと季節に合わせて収穫する水田②裏作の研究を、自分の田を実験田として熱心に取り組んだことから篤農の士（研究熱心な農業者）と呼ばれています。

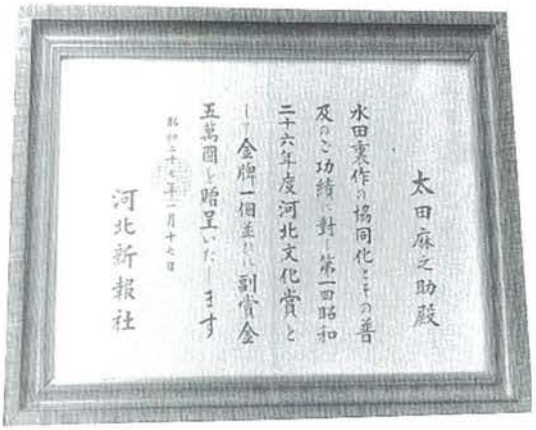
ありし日の太田麻之助

当時、大河原町の農家の田や畑はせまく、けっして収穫は多くありませんでした。そこで、町では、秋に稲刈りが終わった後、麦・菜の花・レンゲ草の種をまき、春の田植え前に収穫する三色（麦の緑・菜の花の黄・レンゲの紫）運動という農業改良事業を推し進めていました。太田はその中心となり、自分の水田を提供して自ら耕作し、試行錯誤しながら裏作と米作りについて研究し、裏作の技術を広めていきました。その後、裏作技術の向上や普及の実績を買われて柴田郡内の③精農家の代表として昭和二十六（一九五一）年に柴田郡精農家会の会長となり、さらに農業の生産向上に努力してきました。この年、町内の約七割の水田で裏作を行うようになりました。

裏作に力を注いだ太田のおかげで、春の大河原の田園は豊かな耕土となり、麦の緑と菜の花の黄色、それにレンゲの紫の三色が織りなす素晴らしい景色につつまれました。

そして、大河原の耕土は「裏作の里」として全国的に有名となり、当時の農林大臣や国会議員をはじめ、全国各地から多くの人たちが美しい田園を見に来ました。昭和二十六年には、一万人をこえる人々が訪れたそうです。

第１回河北文化賞を受賞



太田麻之助殿

水田裏作の協同化とその普及の功績に對し第一回昭和二十六年度河北文化賞として金牌一個並びに副賞金五萬圓を贈呈いたします

昭和二十七年二月十七日

河北新報社

昭和二十七（一九五二）年、太田は、裏作を自ら実践し、広めた指導者として東北地方の文化や産業に大きな功績を収めた人々に与えられる「第一回河北文化賞」を受賞しました。太田麻之助の裏作

は、見る者をして、
「これはたいしたもんだ！」
と絶賛（ぜっさん）され、
「俺もやってみよう！」
と、魅力（みりょく）ある出来ばえを実際にしめした農業指導者でありました。

稲刈りのすんだ田は、掘り返えされて麦畑や菜種畑に変わっていきます。初夏には麦畑が次々と青田に変身します。太田にとって、このような美しい田園の移り変わりは、今まで苦労を忘れさせてくれる絶景（ぜっけい）となったことでしょう。

太田麻之助は、生涯を通して、不屈（ふくつ）の精神と探究心（たんきゅうしん）を持ち、大河原町の農業の発展に力を尽くした人です。

---

① 振興・・・・学術・産業などを盛んにすること。
② 裏作・・・・主たる作物の収穫後、次の作付けまでの期間を利用してほかの作物をつくること。
③ 精農家・・・収穫が多い農家

※参考資料
・「大河原町史　諸史編」昭和五十九年
・「写真に見る大河原町誌」平成四年

山家竹石 ―大河原の俳句のために―

「晩学の　灯を消し月へ　蛾を帰す」

夜おそく勉強していると、窓辺に月が出ているのに気づき、消灯の時に（月の明かりを求めなさい）と心の中でつぶやきながら、蛾を月に帰すという心のやさしさがにじみ出ている句です。この俳句は、大河原町住吉町に住んでいた俳人「山家竹石」（本名武）が、自然を愛し詠んだ句です。

平成十（一九九八）年、竹石の弟子や竹石を慕う人々の手で、大河原昆虫公園にこの俳句の歌碑が建立されました。山家竹石は、現在の白石市に生まれ、若くして俳句の道に進みました。

山家　竹石

竹石は、自分に厳しく人にやさしい、とてもまじめな性格で、心に決めたことは迷わず突き進む情熱も持っていました。

「ああ、もっと納得できる俳句が詠みたい。」と思い立ち、四十歳を過ぎてから①「阿部みどり女」に②師事し、本格的に俳句の勉強を

大河原昆虫公園の歌碑

はじめました。その後、俳句誌「駒草」の[13]同人になり、いろいろなコンクールへ作品を出品し、数々の入選を果たすようになりました。

[14]還暦を迎えた昭和四十二（一九六七）年に白石[15]公共職業安定所の所長を最後に退職し、情熱のほとんどを俳句に傾けていくことになりました。

（自分が学んできた俳句のすばらしさを、大河原町の人たちにも伝えたい。）

という思いが実現し、昭和四十八（一九七三）年「大河原町樹氷俳句会」を発足させ、初代会長になりました。会員が少しでも思った通りの作品を作ることができるように、いつも作品がよくなるヒントを与えながら、やさしく見守り教えていました。竹石の作風は[16]客観的写生を重視したもので、俳句に表した いものののあるがままを細部まで観察して[17]躍動的に表現することを心がけていました。

「沈みゆく　日を深追ひの　赤蜻蛉」

「沈みゆく日」は、一日の終わりを示すように空を赤く染めて明日へ託す希望のようであり、「深追ひの赤晴蛉」は、何かをただ一筋に追い求める心の象徴のように思えます。この俳句は、竹石の晩年八十歳を過ぎてからのものです。年を重ねてもなお、初心と変わらず雄大な自然に心動かされ、ひたすら作品を作り続けた竹石の一途さが伝わってくるようです。

この句碑は平成八（一九九六）年に、奥州涌谷金俳句全国大会実行委員会の人々の手によって、涌谷町箆岳中腹の石仏広場に建立されました。地元の大河原町だけではなく、宮城県内の俳句を愛する人たちから尊敬されていたことの証と言えるでしょう。

平成九（一九九七）年一月、大河原町民はもちろんのこと、俳句を愛する県民に慕われた山家竹石はこの世を去りました。しかし、彼の俳句にかけた情熱と愛情は、彼の作品を通して未だに私たちの心に語りかけています。

---

① 阿部みどり女　高浜虚子に師事し、俳誌「駒草」を創刊・主宰した俳人。
② 師事　先生に仕えて教えてもらうこと。
③ 同人　同じ趣味や志をもった仲間同士の集まり。
④ 還暦　六十歳。
⑤ 職業安定所　仕事につくことを世話する施設。今のハローワーク。
⑥ 客観的写生　特定の立場にとらわれず、物事を見たり考えたりし、景色や事物のありさまを見たままに写し取ること。
⑦ 躍動的　動きが生き生きとしているさま。

涌谷町箆岳の歌碑

※参考文献
・晩　学（山家竹石遺句集）
・半沢房枝さまの言葉による

金ヶ瀬　新寺地区　洞秀院　に眠る

源頼朝と戦い　大河原で戦死した人

照井　太郎高直

「首洗い池」とは、戦いで人の首を刀で切り取り、流れる血を水で洗った池のことです。大河原バイパスを柴田町方面に向かい、左側に見える韮神山のふもとに、その首洗い池があったようです。「千塚」とは、千人もの兵隊のお墓のことです。これは、フォルテから村田町方面に向かってすぐ左側の地名で、その他に「照井橋」「大塚」という地名は、今でも使われています。

文治五（一一八九）年八月十一日、源頼朝軍は二十八万の兵を従え、源義経が逃げ込んだ平泉の藤原泰衡軍を滅ぼすために鎌倉を出発しました。大河原の地に到着すると、大谷から小山田、金ヶ瀬の新寺付近まで陣を構えました。迎え撃つ藤原軍は、照井太郎を大将として韮神山から村田町沼田にかけて陣を構え、戦いを始めたのです。両軍とも必死で戦いを挑み、激しい戦いとなったものの、大軍二十八万の兵には勝ち目がなく、大将、照井太郎は奮闘の甲斐なく、小山田で力尽き戦死してしまいました。今も残っている観音塚という地名は、照井太郎が戦死した場所を示していると言われています。

金ヶ瀬の新寺地区に「洞秀院」という寺がありました。照井太郎の法名（亡くなった後の名

前）は、「洞秀院月溪円水居士」です。つまり、お寺の名前は、照井太郎の法名「洞秀院」をもらって名づけたものなのです。八月十一日夜、柴田町船迫において源頼朝は、戦いで獲得した首を一つ一つ確かめ、戦いで功績をあげた侍たちに、褒美をあげたことが分かっています。

「首洗い池」「千塚」「照井橋」「大塚」という地名が、今も語り継がれていることを考えた時、大河原町にとって「照井太郎」とは、源頼朝や源義経を語る時には、決して忘れてはならない人物なのです。

金ヶ瀬に「馬取田」という所があります。同じく文治五年八月、平泉の藤原氏の嫡男、西木戸太郎国衡は、源頼朝の家来和田小太郎義盛と一騎打ちとなりました。弓での戦いとなり、義盛の放った矢が国衡の腕に命中したのです。その時、国衡の馬が田んぼの深みにはまり、一命を落としました。

それ以来、この地を人々は「馬取田」と言っています。

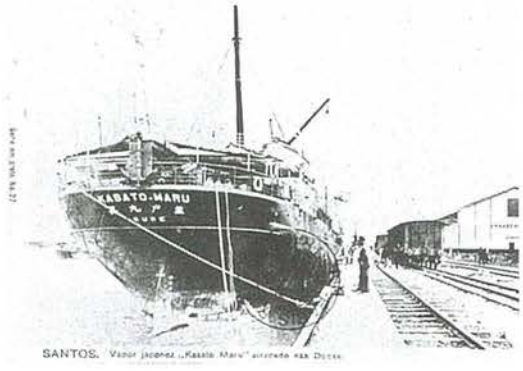
ブラジル等へ１６０人の移民を
カムチャッカに缶詰工場を
山家　幸内（６代目）

「貧しい農民を救いたい」

六代目山家幸内（伊勢八）は決心しました。働いても働いても、貧しい生活から逃れられない農民を見た幸内は、明治三十三（一九五八）年、二十一歳の若さで当時誰もが考えられない、移民会社を創立したのでした。

平村（現在の金ヶ瀬）はじめ大河原地方の人々を、地球の反対側の南米（ブラジルやアルゼンチン）に移り住ませ、豊かな生活をさせたいと考えたのです。いよいよ希望者を募集することになりました。すると、一年目は百六十もの人が希望し、南米で農業をすることになりました。幸内は、貧しい移民者に対し、旅費や生活費を貸し出したり衣服の世話をしたりするという心配りを行い、人々から大変喜ばれたと言うことです。

このようにして十年間が過ぎ、千人を超える移民者を送り出すことになりました。昭和の時代になり第二次世界大戦で人々の生活が苦しくなった時、南米の移民の人々から金ヶ瀬地区に対し、驚くほどの



当時の移民船

支援物資が届いたことは、今も語り草になっています。

同時期、幸内はロシアのカムチャッカに缶詰工場を建設しました。幸内は、若者の夢を、厳寒の北洋に向け産業の振興を図ろうと考えたのです。ここで作られたのは蟹缶が主なものでした。当時は、大変高価な缶詰で、普通の町民の口にはめったに入らないものでした。幸内の発想は実に豊かで、缶詰に使われなかった蟹の残りなどを使って、銀キツネを育てることを思いついたのです。そして銀キツネの毛皮を遠く、イギリスのロンドンに輸出するまでになりました。

六代目山家幸内（右）

カムチャッカでキツネの飼育

函館の缶詰倉庫

カムチャッカの缶詰工場風景

西の寺（最勝院）に眠る

明治維新に関わる　大河原の人

浅草　宇一郎

戊辰の役があった明治元（一八六六）年、江戸幕府を滅ぼした長州藩が、官軍として東北地方まで一気に征服するため、参謀「世良修三」を先頭にして福島藩（市）まで攻めてきました。仙台藩など東北各藩は、会津藩の降伏を勧めていた話し合いの中で、世良は「白河以北、一山百文」（白河市より北は、一つの山が五百円位の価値のない土地）など、東北を侮辱し続けていたので、「誰か世良を捕まえて懲らしめろ」ということになりました。

そこで選ばれたのが、福島の目明し（役人から頼まれて犯人を捕まえる人）をしていた大河原町出身の「浅草宇一郎」でした。浅草は、世良が福島藩から接待を受け「金沢屋」で大酒を飲んで泊まることを知りました。浅草は考えました。

「世良を捕まえれば東北の人々は喜ぶが、薩摩藩や長州藩からは命を狙われるに違いない…。」

しかし、浅草は、東北の人々の思いを遂げるため、討ち入ることを決意した。

浅草は、手下を連れて真夜中に金沢屋にそっと入りました。そこには、女中たちがいました。女中たちには怪我をさせたくなかったので、裏口から逃げるよう手招きをしました。その時浅草は、世良を発見したのです。深く酔っているようでした。次の瞬間、世良は刀を抜き取り浅草

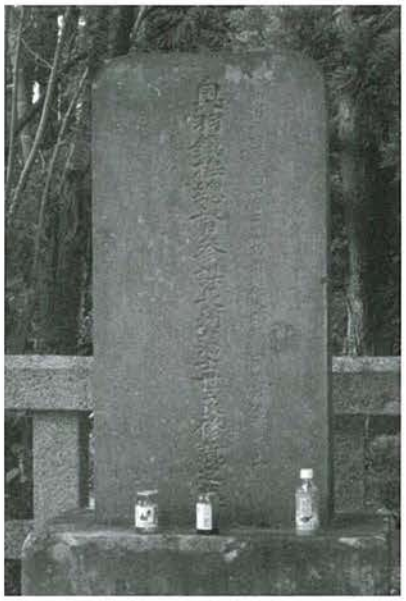
たちに「エーイ」とばかりに切り付けてきました。さすが長州藩で鍛えた腕は相当なものでした。

乱闘はしばらく続きましたが、世良は浅草の手下に捕えられ、阿武隈川の河川敷に引き出されました。世良は、その河川敷において、仙台藩や福島藩の人々により斬殺されたのです。

白石市の福岡小学校の隣に、「世良修三の墓」があります。そこの碑文には、

「〇〇所殺　年三十四」

と書いてあります。つまり、東北征伐軍の参謀、世良修三は〇〇のために殺されたというのです。しかし、〇〇の部分は何者かによって、削りとられ消えて読み取れません。では、誰のために殺されたのでしょう。そこには、「為賊」（ぞくのため）と書いてあったらしいのです。東北征伐軍から見れば世良を殺したのは確かに「賊」です。しかし、東北軍から見れば東北を救おうとしたのは、大河原町出身の「浅草宇一郎」ほか仙台藩士たちなのです。



世良修三の墓〔白石市福岡〕

浅草宇一郎の画像〔福島市長楽寺〕

浅草宇一郎の墓〔最勝院（西の寺）〕

消防や用水を整備し

大河原の町の発展に尽力した元町長

佐藤　源十郎（さとう　げんじゅうろう）

大河原小学校の校庭東側にある庭園に銅像があります。その銅像の人物は、大河原町第十二代町長の「佐藤源十郎」です。そして、銅像の後ろには顕彰碑（けんしょうひ）があり、次のような文が刻（きざ）まれています。

（顕彰碑に刻まれた原文）

一、身ヲ治ムルハ難シ一家ヲ斎フルハ更ニ難シ　郷土進展ニ全幅ヲ捧ゲテ信ヲ一身ニ集め聚メ一郷ノ師表トシテ四民敬慕ノ焦點トナリ郷黨ヲ厚クシテ後世ニ遺訓ヲ垂ル

是偉大ナル人格ノ顯證ナリ佐藤源十郎翁ノ生涯ヤ将ニ好範タリ

翁ハ宮城県柴田郡大河原町字一九五番地勤儉産治メテ立志傳中ノ人ナリ資性円満温厚内気慨ニ満チ特ニ愛郷精神澎湃タルモノアリ、町会議員トシテ貳拾年町政ノ作振ニ参与シタルヲ公職ノ根幹トシ学務委員町教育会長等教育向上ニ協力シ大正十三年衆望遂ニ大河原町長ニ挙ゲラレ在職八年町内外ノ施設改善枚挙ニ遑アラズ又黒澤尻用水青根植林ノ管理者柴田乾繭組合長柴田郡農会長同郡町村長会長大河原區裁判所金銭債務調停委員等地方自治ノ振興勸農行政ノ伸展ニ努力セラレタル事績ハ又以テ數フ可カラズ

大正四年大河原消防組頭ヲ拝命シ貳拾四年間警火防水ノ大任ヲ果シ更ニ消防組基金造成並ニ互助会ヲ起シテ共済ノ実ヲ挙ケ

宮城県消防協会副会長同県消防組頭会評議員ノ要職ニツキ県下消防組ノ伸長ニ貢献ス

昭和三年大禮記念章ヲ授与セラレ四年宮城前ノ御親閲ヲ賜フ八年大日本消防協会長ヨリ功績章ヲ授与、九年満州事変ノ功ニヨリ賞勲局ヨリ木盃ヲ下賜セラル

翁ハ斯ク町政並ニ消防組功労者タルニ止マラズ其ノ一歩一歩ノ前進向上セル人格的陶冶ノ発露ハ地方人心ヲ指導啓発スルノ好典範タルヲ失ハズ

茲ニ翁ノ寄与セシ功績ヲ後昆ニ傳ヘ且謝恩ノ為町会決議ノ上町及消防組協力発起同感ノ淨金ヲ醵出シ翁ガ百年ノ壽像ヲ壽イテ頌徳建立セル所以ナリ

昭和十三年十一月三日　撰文　大河原町長　庄司一朗
衆議院議員
書　大河原消防組頭　森　朋吉

佐藤源十郎の銅像（大河原小学校）

顕彰碑に刻まれた内容を大まかに訳すると、次のようになります。

郷土の発展に力を注ぎ、信頼を集めた。郷土を代表する人物として町民から慕われ、後の世に言葉を残した。その偉大なる人の名は「佐藤源十郎」という人物で、その生涯はまさに後世の良い手本になった。宮城県柴田郡大河原町字一九五番地に生まれ、その性格は温厚で気概に満ち、特に郷土を愛する気持ちがとても強い人物であった。町会議員として二十年間町の政治に力を尽くした。教育向上にも協力し、大正十三年、ついに大河原町長に推薦され、在職すること八年間。町の内外の施設改善に力を注いだ。また、多くの役職を兼任し、用水路の整備や農業の発展に努力するなど、大河原町の発展に尽力した。その業績は数え切れないほどであった。

大正四年に大河原の消防組頭に任命され、二十四年間、警火防水の大任を果たし、さらに消防組基金をつくり、また互助会を起こした。

それらの業績が認められ、昭和三年に「大禮記念章」を授与され、昭和八年に大日本消防協会長から功績賞を授与される。昭和九年に満州事変の功績により、賞勲局から木盃を賜れた。その一歩一歩前進し、向上する人格は人の模範である。

後世に功績を伝え、謝意を表すため、大河原町議会で決議の上、この像を建立することになった。

町役場の会議室に飾られている佐藤源十郎の写真

この顕彰碑から、佐藤源十郎がいかに大河原町のために力を尽くしたのかが分かります。

大正から昭和にかけて、大河原町の発展に尽力した佐藤源十郎。その銅像は、未来を担う子どもたちの姿をじっと見守ってくれています。

おおがわらの先人集　志を未来に繋ぐ

（敬称略）

監　　修	大河原町教育委員会教育長		齋　一志
アドバイザー	大河原町文化財保護委員会委員長職務代理者		及川　義行
作成委員	総括責任者	金ヶ瀬小学校　校長	鈴木　仁一
	委員長	大河原南小学校　教諭	髙橋　利亘
	副委員長	金ヶ瀬小学校　教諭	佐藤　好信
	委　員	大河原小学校　教諭	鈴木　一道
	委　員	大河原中学校　教諭	鈴木　巌
	委　員	金ヶ瀬中学校　教諭	茂林　浩樹
	委　員	生涯学習課社会教育指導員	森　貢喜
	委　員	教育総務課教育相談員	堀　努
原稿執筆者（作成委員除く）			
		大河原小学校　教諭	小片　広典
		〃　〃	遠藤　孝子
		〃　〃	髙橋　大介
		金ヶ瀬小学校　教諭	小野　厚子
		〃　〃	高橋　玉恵
		大河原南小学校　教諭	井上　哲男
		〃　〃	熊谷　陽子
		大河原中学校　教諭	氏家　幹夫
		金ヶ瀬中学校　教諭	松崎　恵子
事　務　局	大河原町教育委員会学校教育専門監		千葉　英一

【題字　大河原町教育委員会教育長　齋　一志】

「おおがわらの先人集」発刊にあたり，資料の提供やご協力をいただきました皆様に深く感謝申し上げます。

平成２７年４月８日　初版発行

編集者　おおがわらの先人集作成委員会
発行者　大河原町教育委員会
印刷所　株式会社津田印刷